

アキュラグループ・ジャープネットシンポジウム開催 日本の感性と文化を活かした建築を求めて

日本最大級の工務店ネットワーク「ジャープネット」(主宰：株式会社アキュラホーム代表取締役社長・宮沢俊哉、本社：東京都新宿区)は、2016年7月14日、ホテルイースト21東京(東京都江東区)において、「第17回ジャープネット全国大会」を開催、その後「アキュラグループ・ジャープネット シンポジウム」を実施いたしました。住宅・建築関係のさまざまな分野から識者にご登壇いただき、「木造住宅の可能性と近未来の豊かな暮らし」についての議論が展開されました。

■基調講演 「和」のテイスト～すまい方と素材と形～

——株式会社アルセッド研究所代表取締役所長・三井所清典氏

以前の日本の建築教育は世界中どこでも同じものをつくればよいという発想でしたが、それではほんとうにいいものはできません。地域に根付いた建築でないと地域を壊してしまうことになるのです。私は建築物のなかにいかに日本の良さを取り込んでいくのか、それが大切だと考えています。

たとえば、東京ミッドタウンの上層の外観デザインにはジャパニーズテイストが表現されています。アプローチ部分には日本の庭園にあるようなものが選ばれ、建物の内部には桂離宮の松琴亭

(しょうきんてい)にある一抹模様が採用されています。この基本コンセプトを担当したのは外国人なのですが、彼らにとっては、日本の建物なのだから、「これが日本だ」という要素を採り入れるのが当たり前のですね。日本人だと、こうはいかなかったかもしれません。

住宅も同じではないでしょうか。日本は両側を海に囲まれており、水に恵まれています。また、緑が豊富で樹木があふれています。日本の住まいはそれらを使って建てられ、雨が多く、湿気が多い気候風土に対応して、大きな勾配の屋根、高床に土間といった基本を守ってきました。外部との関係をみても、多少濡れてもいい濡れ縁があり、廊下を挟んで内部の畳は濡れないようするなど、段階的構成になっています。これは、理に適った構成であり、この考えを破るときには、破るだけの理由が必要です。

古来の知恵にはいまでも有効なものが少なくありません。庇(ひさし)や簾(すだれ)、御簾(みす)、障子など、日差しをコントロールするものが何種類もあり、それぞれに使い分けできます。外国のものを採り入れることも重要ですが、それだけではなく、こうした日本の伝統をもっと活かすべきです。

和歌の世界には“本歌取り”という考え方があります。昔のいいものを、今の時代に合わせて活かすということであり、これは住宅にもあてはまります。私は、日本の建築技術は世界で一番美しいものをつくれる技術を持っていると思っています。でも、残念ながら日本らしさを活かせる力が足りません。

日本らしさを採り入れるためには発想の転換が必要です。東京ミッドタウンで外国人が実現したことを、日本人ができないわけではありません。いまこそ、日本の感性と文化を活かした建築が求められているのではないのでしょうか。



<本件について報道関係からのお問い合わせ先>

株式会社 アキュラホーム 広報課 堀越・西口 Email: aqura_pr@aqura.co.jp

住所：東京都新宿区西新宿 2-6-1 新宿住友ビル 34F TEL:03-6302-5010 (直通) FAX:03-5909-5570

●写真データは右記よりダウンロードすることができます。 <http://www.aqura.co.jp/news.html>

■パネルディスカッション 木造住宅の可能性と近未来の豊かな暮らし

[出席者]

株式会社マウントフジアーキテクトスタジオ一級建築士事務所主宰：原田真宏氏

有限会社MOK-MSD 主宰：三澤文子氏

株式会社ブルースタジオ執行役員：石井健氏

海建築設計研究所：中野海太郎氏

[コメンテーター]

株式会社アルセッド研究所代表取締役所長：三井所清典氏

[司会]

株式会社アキュラホーム住生活研究所所長：伊藤圭子

——原田さんは基調講演を行っていただいた三井所先生と子弟関係にいらっしゃるようですが、木造住宅についてどうお考えですか？

原田氏：デビュー作は予算150万円のほとんどセルフビルドの住まいでした。ゴールデンウィークの3日間で建てて、その後住みながら改造を加えていくという考え方です。木造だからこそ可能な手法とあっていいでしょう。その後も集成材をフルに活用した建物、また鉄筋コンクリート造でありながら木を面材として使った建築物も手がけたりしました。今年竣工する建物としては、真ん中に大黒柱を建てて、それに屋根を菅笠状に下げて、16mの開口部を実現、外壁も自由に開閉できるようにして、地域の人たちと交流しやすいようにしたものがあります。さらに、栃木県益子町の道の駅では、木造で30mスパンの建物をつくりました。建築というのは、新しいものを採り入れればいいというものではないし、古いものだけでもいいわけじゃない、何より「良くありたい」ということに心がけています。そうすれば、非常に新しいのに、どこか懐かしいことが起こってくるという気がします。



——三澤さんは地域木材を使用する木造住宅を実践されています。具体的な事例などをご紹介ください。

三澤氏：テーマはサステナブルリレーションシップです。山の木を伐ってきて、都市につなげる木造住宅のデザインということでしょうか。たとえば、2014年に設計した「あかつきの舎」は、柱は杉、土台に檜を使いました。地元の気候風土に合い、輸送などの無駄が少ない地元の木を使うということで、この場合には紀州材を使いました。設計上は、1.5mの軒を設けたのが特徴です。若いときに設計した住宅では、庇のないデッキをたくさんつくってききましたが、それがいま雨ざらしになり、シロアリが発生するなどメンテナンスで苦労しています。やはり、軒をつけて雨に濡れないようにするのが安心です。最近、60代後半の方からの建築やリフォームの依頼が多くなりました。そこでは、本物の木を使って味わいのある住まいにしてほしいとか、家族がそれぞれに過ごせる思い思いの場をつくってほしいとか、家族、夫婦がゆったりとくつろげる家にしてほしいといった希望が多くなってきました。そうしたご要望に応えるためには、やはり木造の住まいということになりますね。



——石井さんは、中古住宅のリフォーム、リノベーションというお立場でのお仕事が多いわけですが、その点からみた木造住宅というのはどうでしょうか？

石井氏：最近、都心部を中心に、中古住宅を買って自分たちなりにリフォーム、リノベーションして自由に生活したいという人が増えています。そこでは、和の暮らし、伝統を採り入れて上手に使いこなしたいという人が多いですね。古い建物を上手に活かして、友だちを呼んでパーティを開くなど、コミュニティづくりに役立っている人が多いという印象があります。これは、たいへんいいことだと思います。というもの、日本ではこ



れまで「建てては壊す」の繰り返しで、資産の多くが失われてきました。過去 50 年ほどの住宅投資と、その結果の住宅の資産価値の推移をみると、日本では 900 兆円投資しているのに、現在は 400 兆円の資産価値しかありません。500 兆円もの資産が失われているということです。それが、アメリカでは投資した分とほぼ同じ資産価値が形成されているのです。日本でも、いまある住宅を上手に活用して、資産として活かすべきです。その点、木造住宅ならリノベーションの自由度が高く、有効活用しやすいと思います。

—アキュラホームのAQレジデンスの設計監理を担当された中野さんはいかがでしょう？

中野氏：修行時代にはいろいろな建物を手がけました。四国の美術館では、作品を見終わるまでは閉じられた空間で、最後にラウンジで瀬戸内海が見渡せる開かれた空間になるという変化を楽しめるようにしたり、青山通りのオフィスビルでは、特殊な材料を使って人の感性にいい影響を与えるように工夫したりもしました。また、限られた予算で木造住宅にチャレンジしたりもしました。AQレジデンス瀬田モデルでは、建物を白い四周の壁が囲んでプライバシーを確保し、しかし、その壁のなかには開けたエントランスや庭を設けて、季節のいいときには開け放てるようにしました。それでも1階はどうしても閉鎖的な環境になるわけですが、その分、2階に上がればいきなり空が開けて、開放的な空間となるように配慮しました。いったん閉じて、再度開かれるからこそ、外部環境を繊細に感じ取れる住まいになっているのではないかと思います。さらに、昼と夜では外観デザインの印象はまったく異なります。さまざまな変化を楽しめる住まい、それが瀬田モデルではないかと思っています。



—ありがとうございました。三井所先生、皆さんのお話しをどのようにお聞きになりましたか？

三井所氏：原田さんや三澤さんのお話では、地域のテイストを重視した先に、和のテイストがあると感じました。また、石井さんのまちづくりの考え方を全国的に進めたいと思いますし、中野さんの超モダンの建築もやはり、匠の技術が活かされていて、わが家に文化財があるという印象を抱きました。それぞれにたいへん興味深いですね。



—なかでも、古いものを活かすというお話が多かったと思うのですが、三澤さんは木造住宅の寿命を延ばすということをどうお考えですか？

三澤氏：英国には建築病理学という考え方があります。住宅を診断して、病理学に基づいて再生します。それを担当する「住宅医」という存在を、日本において育成していきたいと考えています。たとえば、耐震性能をあげる、断熱性能を高めるなど、新しいものをつくるだけでなく、古いものを改めていくことも楽しいものです。それと同時に、建築したり改修したりするときには、日本の木を使う、地元の木を使うということも重要になります。それによって地元にお金も落ちて、地域の活性化にもつながります。

原田氏：そこにある材料で良いものをつくろうとすれば、どこかしらかつてあった様式に近づいていきます。地元の風景と連動し、そこで活動している職人さんとも連動します。裾野が永遠に広がっていくのです。住宅はできたときが竣工ではありません。その後も常に変化し、文化とも連動し、地域に開いている、そんな存在だと思います。壊してしまうのではなく、未来につなげていくことが大切です。住まいは重ね着することでどんどん価値が上がっていくはずですよ。

—その点では、つくり手だけではなく、使い手がどうかということも問題ですね。石井さんはリフォーム、リノベーションなどで使い手に近いお立場だと思いますが、いかがでしょう？

石井氏：最近収入格差など社会的な問題も広がっていますが、そのなかでも多様な価値観が生まれ、木造住宅を見直そうという動きもあります。木造住宅が長い間日本の住宅の主流であり続けているのは、やはり居心地がいいからであり、それを上手に使いこなしていくために、インスペクシ

ョンも広がっています。今後はますます木造住宅を上手に使っていかうとする動きが強まるのではないかと思いますね。

中野氏：住んでいる人が、自分たちのライフスタイルやライフステージの変化などに合わせて変えていくのはいいことだと思います。定期的にメンテナンスすれば長持ちしますし、愛着もわくでしょう。住宅展示場のモデルハウスだって新しい要素を加えたり、古いものを差し引いたり、部分的に変えています。徹底的に使い倒していくのが、住宅の幸せな未来じゃないでしょうか。

三井所氏：そうした過程で日本の匠の技を積極的に組み込んでほしいですね。古い建築は誰が手をつけてもいいのです。それが木造の在来工法の魅力のひとつでもあります。閉じられた工法のクロージドマーケットではない、オープンマーケットのメリットとっていいでしょう。

——木造住宅の魅力は、時代を超えて受け継いでいけるということなのですね。100年経ってからも会話できる、リレーしていける、それが木造住宅の可能性ということかもしれません。そんな木造住宅に携われる喜びを感じながら、よりよい住まいづくりに励んでいただければと思います。

■ 第17回ジャープネット全国大会 概要

年に1度、全国各地の会員とアキュラホーム幹部社員が集い、1年間の活動実績と当年の方針を共有する場として開催。近年はシンポジウム等を同時開催し、会員だけでなく学識経験者、行政、住宅関連団体、一般の方へも開かれた会として発展しています。

■ ジャープネット（JAHBnet）とは

ジャープネットは全国285社の工務店・ビルダーなどが加盟する工務店ネットワーク組織。アキュラホームが94年に独自の住宅建設合理化ノウハウを体系化した「アキュラシステム」を開発。これまでに約2600社の全国の工務店に導入されると共に、98年に（財）日本住宅・木材技術センターの「木造住宅供給支援システム」に認定され、その仕組みをもって工務店組織「アキュラネット」（現ジャープネット）を設立。全国規模のネットワークによるスケールメリット、地域密着企業ならではのダイレクトサービスを併せ持つネットワークとして全国のユーザーに「良質な住宅を適性価格」で提供。